パネル

ム世界の懲励を惹起することになったからである。

以上のような現代的な課題をも念頭に置きながら、また、早
朝のパネルにもかかわらず参加して討論に加わられた多数の
方々に対する感謝の念と共に、われわれらの共同研究をさらに深
めたいと考えているところである。

宗教における「語りえぬもの」と「示しうるもの」

人文科学研究におけるモデル化の意義

渡辺光一

二十一世紀は、宗教の差異を主因とする政治的・暴力的紛争の
時代であった。しかし、一方で二十世紀は、先進国を中心と急速
に世俗化が進展し宗教が力を失った時代でもあった。二十一世
紀に世俗化が進展し宗教が力を取り戻すという現象は、一見相反するようすにみ
えながらも、それぞれを宗教間の対話の相違と宗教・世俗間の
対話の失敗であると捉えるとき、その本質は宗教的対話の失敗
であると理解され、特に三つ目の問題に焦点をあてていることである。信
徒が、自分の認識能力の限界を超えた宗教的真理を強いて
認識しようとするすれば、都合のよい考えを集め「狂信」とされ、そ
れを集団で増強して「カルト化」としても、むしろ自然的な帰結だ
ろ。これは、社会心理学でいう認知的不協和や集団分極化現
象などとも関係がある。筆者らの実証研究でも、スピリチュア
テーマに関する日本最大のポータルサイト「スピリチュアルテニス」。他者と共生できない、自己の考え方を固執する人ほど、スピリチュアルについての低幼な説教的な言語を用い、自分に理解できないことを言い争っている子供の喧嘩と同じだともいえる。研究者や宗教者については、同样かもしれませんが、問題の第一は原理的に解決の可能性が無いので、認識能力を超えた哲学的考察や観念的対話には実際的な効果が期待できない。

宗教とその背後の存在論を表現しようならば、宗教間対話は初めて人類普遍の地平において現実となる。例えば、宗教と存在論はその構成とその解析、形式論理学的考察の適用、オントロジーの枠組みなどの情報科学的な概念記述方法論の援用等、様々なアプローチを図る。それによって、状態変移や証明可能性の観点から、存在論と実践論・認識論の間に、ヒートポンプモデルとレーションのような相互コンバーチカルをもたらす（これは宗教間の通約可能性の十分条件となる）。

たとえば、「無限論のステファノ」は、「神仏などの超越的な存在」は人間の直感を超えた認識を超えた崇拝なものであるという敬虔さ、「神は人知を超える」超人を含む宗教法を選択し、企業でIT専門家とユーバーの認識能力や言語ゲームの差を埋める価値創造に利用されていているが、宗教家と専門家と信者というユーバーのコンボレーションである宗教でも利用を期待できる。認識可能な最小限のモデルが明確に共有され、「などんだ、こんなことしか分かれてないのか」という気分がつく、宗教教義・宗教テロで人を殺す必要は無くなるだろう。